

二〇一八年度 卒業論文

蓮如の大阪における教化活動

— 光福寺資料をめぐって —

コピー

禁 蔵

L150078

津田ほのか

目次

序論	1
本論	2
第一章 蓮如の生涯	2
第二章 蓮如の教化活動	5
第一節 『御文章』による伝道	5
第二節 六字名号の授与	11
第三章 大阪における蓮如の足跡	15
第一節 大阪における教化活動	15
第二節 光福寺の蓮如関連資料の検討	19
結論	24
註	
参考文献	

コピー厳禁

序論

本論文では、後に述べるように蓮如と自坊の光福寺（大阪府太子町）との関係を明らかにすべく、本願寺を日
本有数の教団に発展させていった蓮如の伝道教化について、とりわけ大阪¹での活動を中心に検討することを目
的とする。このテーマを選んだのは、私が生まれ育った大阪のお寺（光福寺）より実如の方便法身像が見つかり、
同時に蓮如筆楷書の六字名号も見つかったため、蓮如の大阪における教化活動と思想に興味をもったことがきつ
かけである。

大阪での蓮如の伝道教化について、岡村喜史氏は、

河内を通過する時、蓮如宗主がどのような伝道教化を行ったのかについては定かではありませんが、その後
の本願寺の教線展開を考えていくと、河内を単に通過しただけではなく、道すがら伝道教化を行い、お念仏
の種をまいていったことが想像できます。²

と指摘しており、その後の本願寺教団の発展を考える上でも、蓮如の大阪での教化活動を明らかにすることは重
要であるといえよう。

蓮如の大阪での教化活動の一端を解明するために、本論文では六字名号がどのような経緯で自坊の光福寺に下
付されたのか、また蓮如と自坊、あるいは地域社会との関係を光福寺に所蔵される資料も活用しながら明らかに
したい。

そこで本論文では、第一章では蓮如の生涯を概観しながら、大阪で教化活動を展開するに至った背景を確認す

る。第二章では蓮如がどのような教化方法で本願寺教団を拡大させていったのかについて、とくに六字名号の下付や『御文章』による伝道活動に注目してみたい。第三章では大阪における蓮如の教化活動の一端を明らかにすべく、光福寺に六字名号が下付された経緯や蓮如と地域社会との関係を明らかにし、今後の寺院活動に活かしたいと考える。

本論

本論

第一章 蓮如の生涯

蓮如が大阪で伝道活動を行うに至った経緯を明らかにするため、まずは蓮如の生涯を概観しておきたい。³

蓮如は応永二十二年（一四一五）二月二十五日、本願寺第七代存如の長男として東山大谷の本願寺において誕生。幼名は布袋、または幸亭とされている。蓮如の母については、出自も生国も伝えられていないが、蓮如の十男である実悟の『拾塵記』によると蓮如の祖母に仕えていた女性だと伝えられている。しかし、蓮如が六歳の頃、父の存如が海老名氏の娘と結婚することとなったため、応永二十七年（一四二〇）蓮如六歳の頃、母は鹿の子紋りの小袖を着せた蓮如の肖像画を絵師に描かせ、蓮如の御影を形見に大谷から去った。永享三年（一四三一）十七歳になった蓮如は、青蓮院で得度し法名を蓮如と名乗る。また同時に日野一門の広橋兼郷の猶子となり諱を兼

寿と称した。

康正三年（一四五七）第七代存如の死後、継母の如円尼は長子である応玄に継職させようとした。応玄はすでに成人し二十五歳に達しており、また、はやくから青蓮院にて学んでいたため、宗主の一族はこの意見に賛成した。しかし、蓮如の叔父如乗が、蓮如は本願寺の後継者になると存如が決めたことであると主張した。実際には存如の譲状は残っていないが、若くから存如に代わり聖教を書写し門徒に下付していたことから、後継者として認められていたところがある。この如乗の主張によって蓮如は本願寺第八代目を継職。蓮如が継職する以前の
本願寺は社会的にはまだ認められていなかったため、天台化することによって命脈を保ってきた。そのため、浄土真宗にはふさわしくない風潮が目立っていたため、八代目を継職した蓮如は本願寺の改革に着手した。たとえば、本願寺は堂内を上下二段に区別し、仏前の脇に三〇センチほどに切った竹を積み、説法中に下壇で居眠りする者がいればその竹を投げつけて目を覚まさせていた。そういった乱暴な伝道姿勢を改め、上下に区切った段を廃止し、親鸞が目指した御同朋御同行に沿って民衆と同座して語り合い伝道活動を行ったり、本願寺や末寺に安置されていた本尊も浄土真宗にふさわしくない本尊と判断すると絵像や木像を焼却した。⁴

また蓮如は近江南部の地で伝道活動を行い、「帰命尽十方無碍光如来」の金泥十字名号を本尊とした念仏道場を創設。しかし、近江各地に浄土真宗の道場が広がっていくことは比叡山にとって好ましい状況ではなく、寛正六年（一四六五）に比叡山の衆徒により東山大谷の本願寺が破却されたため、親鸞の木像とともに南別所に移り、しばらくは金森・堅田・大津などを転々とした後、親鸞の木像を大津近松に安置し、文明三年（一四七一）越前

吉崎に坊舎を建て、「南無阿弥陀仏」の墨六字名号を書いて人々に授与したり、『御文章』を製作し浄土真宗の教えを分かりやすく伝え、『正信偈和讃』刊行など独自のな伝道展開をした。このような活動によって北陸を主軸に東北地方にかけて教線を広めた。蓮如の説く教えに多くの人が共感し浄土真宗の門徒が広がり、次第に蓮如のいる吉崎にたくさんの人が集まるようになる。しかし、その後吉崎を退去することとなるが、退却理由は二つあり、戦国時代において、門徒が増え吉崎に人が集まることは、地域の支配者層から警戒されることとなり、抗争を避けることが難しくなったためと、文明七年（一四七五）加賀門徒と加賀の守護富樫政親との間で土地の奪い合いが始まった際に、

劣勢の急進派一揆衆は和与の仲介を求めてきたが、蓮如はその要請を取次がないで、逆に「上人は戦いを求めていない」と虚言を弄し、戦闘の継続を強く促した⁵。

と蓮如の側近である蓮崇の野望が発覚したため、文明七年（一四七五）吉崎を船で退出した。その後、若狭小山上陸し、丹後・摂津を経て河内出口に至り、出口御坊を創建して滞在した。また、出口御坊より淀川を挟んだ対岸にある摂津の富田にも赴き、文明八年（一四七六）には富田御坊を創建し、二つを行き来しながら教化活動を行った。

文明十年（一四七八）に山科に移住し、山科に御影堂の造営を開始し、同年に完成すると、大津近松に預けていた親鸞の木像を山科の御影堂に移して、十一月二十八日には報恩講が執り行われ、比叡山の衆徒によって破却された本願寺の再興を山科の地で成し遂げた。山科の本願寺の寺務を五男の実如に譲り、蓮如は山科本願寺の東

側に施設を造り、隠居していたが、さらに浄土真宗の伝道が続けていくという強い意志をもっていたため、明応五年（一四九六）には摂津大阪に至り、新たな坊舎の創建を行い、翌年の明応六年（一四九七）十一月下旬に大阪御坊が完成し、蓮如は晩年をこの地で暮らすこととなる。蓮如は東日本を中心に教化活動を行ってきたため、西日本はまだまだ浄土真宗の伝道は遅れていることを感じていた。そこで、大阪御坊を拠点として、西日本へ浄土真宗を広めていこうと考えていた。⁶晩年を大阪御坊で送っていた蓮如は、明応七年（一四九八）八十四歳になり、しばしば体調を崩すことがあったが、山科本願寺に行くなど伝道活動をしていた。大阪で命を終える決心をしていた蓮如だが、翌年の明応八年（一四九九）二月十八日急遽大阪から山科本願寺に行くと思いい立ち、二十日には山科本願寺に到着、御影堂に参拝して親鸞に別れの挨拶をし、子どもたちに後事を託すなどし、三月二十五日八十五歳で往生した。蓮如は今日の本願寺教団の基盤を作り、さまざまな教化方法によって教線を拡大させたといえよう。そこで次章では、蓮如の伝道教化について、『御文章』や六字名号の下付による教化活動に注目しながら検討してみたい。

第二章 蓮如の教化活動

第一節 『御文章』による伝道

今日、本願寺教団は日本有数の教団であるが、蓮如は教団の教線拡大に大きな役割を果たしたことから、本願

寺「中興の祖」としても知られている。その蓮如の教化活動の特徴の一つとしてあげられるのが『御文章』による伝道活動である。現在もお勤めの際に拝読される『御文章』であるが、蓮如は浄土真宗の法義を伝えるために手紙の形式で寛正二年（一四六一）に初めて『御文章』を製作しており、吉崎時代の四年間には約八〇通書いとされており、吉崎時代には『御文章』による伝道活動に力を尽くしていたことが分かる。その後二五〇通以上の『御文章』を製作した。また、蓮如の時代より前に世に広まっていた談義本の一種に様式が似ていることから、蓮如は真宗聖典だけではなく、世間に広まっている本にも広く目を向けていたようである。⁷

もともとの仏教経典は、古代インドにおいてサンスクリット語やパーリ語などで書かれたものが中国において漢訳されたが、中国から日本に持ち込まれる際には漢文のままを持ち込まれ、日本においては経典を和訳するといふことは進められなかった。そのため、十分な教育を受ける機会がなかった民衆たちにとって難解な漢文の経典を理解することは困難であった。そこに注目した蓮如は情報伝達の手段が十分でなかった時代に民衆たちに理解してもらうため、平易に書かれた手紙を届け、誰かが皆の前で読み聞かせることが有効であると考えたのではないだろうか。この点について岡村喜史氏は、

蓮如宗主は、御文章を製作するに際して、多くのものについては漢字の片仮名交じりで製作しました。片仮名は、外来語や擬音語など耳で聞いた音を表記する時に用いられる文字で、いわば聴覚的の文字とされます。つまり、蓮如宗主が御文章を片仮名で表記したと言うことは、御文章を読み上げることによって、浄土真宗の教えを耳から聞いて受け入れることを意図したものと考えられます。⁸

と指摘しており、蓮如はあらゆる立場の人々が容易に理解できるよう工夫した伝道活動を行っていたことが分かる。それはまさに民衆の立場に立った伝道教化であったといえるのではないだろうか。当時の本願寺門徒は主に農民であったが、農民たちは日中働き、夜のわずかな時間に説教を聞きに来るといのが農民の生活であったため、蓮如は門徒の聴聞の行儀作法などについては一切批判しなかった。むしろ、正しい行儀作法を強要することによって、人々は億劫になり近づくなくなるのであると従来の行儀作法について批判した。その結果、本願寺門徒に農民層が増えたのではなく、蓮如はもともと本願寺門徒は農民層が中心であることを自覚し、こうした教化活動を行ったのである。⁹

一方で、『御文章』第三帖第十三通などにおいては、
それ、当流門徒中において、すでに安心決定せしめたらん人の身のうへにも、また未決定の人の安心をとらんとおもはん人も、こころうべき次第は、まづほかには王法を本とし、諸神・諸仏・菩薩をかるしめず、また諸宗・諸法を謗せず、国ところにあらば守護・地頭にむきては疎略なく、かぎりある年貢所当をつぶさに沙汰をいたし、そのほか仁義をもつて本とし、また後生のためには内心に阿弥陀如来を一心一向にたのみたてまつりて、自余の雑行雑善にこころをばとどめずして、一念も疑心なく信じまらせば、かならず真実の極楽浄土に往生すべし。¹⁰

と記されており、浄土真宗の教義を分かりやすく平易に記しただけでなく、世俗生活において国や各地方の租税や上納物を納めるべきこと、為政者や他宗派と対立しないことなど、門徒の守るべき心得も示されている。

このように『御文章』には教義だけでなく、現実の教団状況や門徒の信仰生活、さらには坊主批判についても記されるようになった。福間光超氏や金龍静氏の指摘によれば、

吉崎においては短期間のうちに多数の信者が帰参し、それらの人びとをどのように指導し、統制して行くべきかという大きな問題に直面しなければならなかったためと思われる。¹¹

とあり、とくに吉崎において教団が急速に拡大したことで、為政者や他宗派との対立が生じるようになり、教義のみならず、世俗生活における心得までも『御文章』において示すようになったものと考えられる。すなわち『御文章』は教団の公式見解として、教団と各地の門徒とを結びわばメディアとして機能しており、それが広範囲での伝道教化を可能にしたのではないだろうか。

また、蓮如は親鸞にはあまり見られなかった女人往生についても積極的に説いており、とくに『御文章』内で多く記している。すなわち親鸞は『浄土和讃』六十首において、

弥陀の大悲ふかければ 仏智の不思議をあらはして 変成男子の願をたて 女人の成仏ちかひたり¹²
と変成男子説よる女人往生を説いている。さらに、『高僧和讃』六十四首にも次のように記されている。

弥陀の名願によらざれば 百千万劫すぐれども いつつのさはりはなれねば 女身をいかでか転ずべき¹³
ここでも『浄土和讃』と同じく女性が救われるのは、男性に姿を変えた後、救われると記されており、阿弥陀仏によらなければ、百千万劫という長い時間が経っても、女性は五障という障りを除くことができないと記されている。親鸞の女人往生思想についてはこの他にはほとんど記されていないのに対し、蓮如は女人往生について多

く記していることから、親鸞のみならず、存覚の考えも影響しているものと考えられる。

存覚は『女人往生聞書』で女人往生について記している。その内の『女人往生聞書』において、阿弥陀如来の第十八願には十方の衆生を往生させると説いている。だからそこには善人悪人も男性も女性もみな含まれており、もれることはないはずである。しかし、一切の衆生をもれることなく皆往生させると説いているはずなのに、さらに第三十五願において女性を救う願を説いている。これはいったいどういうことなのであるか。第十八願の一切の衆生の中に女性が入っていないということなのであるか。第十八願の十方の衆生に女性が入っているならば、第三十五願は必要ないはずである。¹⁴このように自ら問いを立てながら存覚は、

コタヘテイハク、第十八ノ念仏往生ノ願ニ男女ヲエラハスミナ撰スヘキ条ハ勿論ナリ、シカレトモカサネテ
コノ願ヲタタマヘルコトハ如来ノ大慈大悲ノキハマリナリ。ソノユヘハ女人ハサハリヲモクツミフカシ、
別シテアキラカニ女人ニ約セスハ、スナハチウタカヒヲナスヘキカユヘニ、コトサラコノ願ヲオコシタマヘ
ルナリ。コレスナハチ先徳ノ料簡ナリ。¹⁵

と答えている。すなわち第十八願での十方の衆生とは男女を選ばず、みな救うのはもちろんのことであるが、その中でも女性はさらに障りも多く罪深いのでさらに第三十五願をたてられたのであると記されている。つまり、第十八願の十方衆生に女性が含まれていないので第三十五願の女人往生の願をたてたのではなく、女性はさらに障りも多く罪深いので、ことさら第三十五願をたてられたというのである。これを受けて、蓮如は『御文章』第一帖第十通などにおいて、

おほよそ当流の信心をとるべきおもむきは、まづわが身は女人なれば、罪ふかき五障・三従とてあさましき身にて、すでに十方の如来も三世の諸仏にもすてられたる女人なりけるを、かたじけなくも弥陀如来ひとりかかる機をすくはんと誓ひたまひて、すでに四十八願をおこしたまへり。そのうち第十八の願において、一切の悪人・女人をたすけたまへるうへに、なほ女人は罪ふかく疑のころふかきによりて、またかさねて第三十五の願になほ女人をたすけんといへる願をおこしたまへるなり。かかる弥陀如来の御苦労ありつる御恩のかたじけなさよと、ふかくおもふべきなり。¹⁶

と蓮如は第十八願の誓願においてすべての悪人をたすけると記されているが、女性は罪深く疑い深いので、さらに第三十五願を立てて女性をたすけようという願いを起されたのであると第十八願と第三十五願を中心として女性への往生を説いている。蓮如は親鸞の教えを継承しつつ、存覚の女人往生思想に影響をうけていることがうかがえる。

当時、蓮如のもとに集まった信者たちは増加の一途をたどっていた。その中にはもちろん多くの女性も含まれていたことから、『御文章』には女人救済について多く記されたものと考えられる。蓮如が示した女性が救われるための宗教的条件はもろもろの仏、菩薩などに心を引かれず、阿弥陀如来を信じ念仏することただひとつであったことから、さらに蓮如のもとには多くの信者が集まったと考えられる。

このように、蓮如は多くの『御文章』を書き記し、門徒たちに読み聞かせることによって、本願寺教団の教線を拡大させたと考えられる。

第二節 六字名号の下付

本願寺を継職した当初の蓮如の教化活動として特徴的なものは、本尊の統一、授与であった。本尊の制定は必須であると考え、その統一を試みた。すなわち『蓮如上人御一代記聞書』第六十九条には、

他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。当流には、木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり。¹⁷

と記されており、浄土真宗では木像や絵像よりも、名号本尊を重視すべきだとしている。そして、当初は名号本尊の中でも、親鸞がはじめて用いたとされる「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号を重視し、従来の聖教の授与に加えて、新たに絹本の中央に蓮台が描かれた上に、金色の籠文字の十字名号の上下に讃文を添え、その四方に四十八条の光明が放たれた金泥十字名号を本尊として道場に授与し、近江南部を中心に道場を創建していった。しかし、比叡山の膝元である地域の人々が結集し、本願寺門徒としての意識が高揚していくことは比叡山にとつて好ましいことではなく、「無碍光本尊」を安置する「無碍光衆」であると批判されることになり、大谷の本願寺が破却された。これ以降、金泥十字名号の授与を中止し、そこで代わって下付されたのが「南無阿弥陀仏」と紙に墨で書いた六字名号である。蓮如はこの六字名号を生涯に渡って数多く書き、人々に授与した。

名号を授与するというのは、親鸞が門弟に授けた墨書の名号本尊の形式を受け継いだものであったが、親鸞の名号本尊には上下に讃文が記されていた。しかし、蓮如の六字名号には讃文が記されているものは多くみられな

い。これは、吉崎において急激に門徒が増加したことから、自然と六字名号の需要も急激に増えたため、讃文を記した六字名号を授与することが不可能になっていった。そこで、簡易に書ける草書の六字名号を下付することが増えたため、現存する六字名号は圧倒的に草書のものが多い。¹⁸

蓮如上人が慶聞坊に、私ぐらい南無阿弥陀仏のお六字を多く書いたものはおらんだろうとおっしゃったところ、「中国、インドを探しても、あなたのようにたくさんお書きになったお方はありませんでしょう」と慶聞坊が言いましたら、「そうかなあ、そうかもしれないなあ」と蓮如上人がおっしゃったということです。¹⁹

という逸話が残されているほどである。実際、大阪御坊以外はみな坊舎のために寄進された門徒達からの懇志によつて建立されたが、大阪御坊の建立資金だけは、六字名号を書き与えたお礼のお金で建てられたものであることから、いかに多くの六字名号を書き与えたかが分かる。²⁰多くの民衆に名号を書き、授与したのは、それまで仏教に触れる機会が少なかった民衆の目の前に名号を安置することによつて、少しでも念仏が身近なものとなり関心をもってもらふことを意識したものであったのではないだろうか。また、六字名号の紙は竹を原料とした竹紙という種類のもが使われており、繊維が細かいため墨があまり浸透しづらく、墨を吸収しないため、一気に文字を書き上げることができると、一日に大量の六字名号を書き上げることが可能であったと考えられる。日本で竹を原料とした紙の製造がみられるのは明治時代以降であり、室町時代の竹紙は中国からの輸入であったが、こういった竹紙の特徴を知った上で輸入していたと考えられる。²¹

蓮如は、六字名号をただ書き与えるだけではなく、南無阿弥陀仏の意義を民衆に伝えるため、『御文章』にもし

ばしば六字釈を示している。当時は六字名号の意味が誤解されることが多かったため、正すために多く書き記したとされる。蓮如の六字釈は、善導と親鸞の六字釈を継承したものである。すなわち善導は『観経疏』『玄義分』において、次のように記している。

「南無」といふはすなはちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」といふはすなはちこれその行なり。この義をもつてのゆるにかならず往生を得。²²

善導は六字釈について、南無は帰命と訳し、阿弥陀仏の本願を信じ従う心あり、阿弥陀仏の本願は衆生を浄土に救いたいという願いである。そこには、発願回向が具わっており、南無阿弥陀仏と称えることは、本願に誓われている往生の行であるので、南無阿弥陀仏と称えれば、往生に必要な願と行が具わっているので、必ず往生することができると解釈した。さらに親鸞は、この六字釈をうけ『教行信証』の「行文類」において、

しかれば、「南無」の言は帰命なり。(中略)ここをもつて「帰命」は本願招喚の勅命なり。「発願回向」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。「即是其行」といふは、すなわち選択本願これなり。²³

と記し、衆生が阿弥陀仏に対して南無することが問題になっていっているのではなく、阿弥陀仏側が南無していると表している。すなわち南無阿弥陀仏とは阿弥陀仏の衆生へのよびかけである。発願回向とは阿弥陀仏が衆生を救うために願を起こして衆生を浄土に往生させる行を完成させ、その行が衆生にはたらくよう願われ衆生にさしむけられるものであると解釈している。蓮如はこの善導と親鸞の六字釈を受け、『御文章』第二帖第十五通などにおい

ては、

また南無阿弥陀仏といふはいかなるころぞといへば、「南無」といふ二字は、すなわち極樂へ往生せんとねがひて弥陀をふかくたのみたてまつるころなり。さて「阿弥陀仏」といふは、かくのごとくたのみたてまつる衆生をあはれみましまして、無始曠劫よりこのかたのおそろしき罪とがの身なれども、弥陀如来の光明の縁にあふによりて、ことごとく無明業障のふかき罪とがたちまちに消滅するによりて、すでに正定聚の数に住す。かるかゆるに凡身をすてて仏心を証するといへるころをすなわち阿弥陀如来とは申すなり。されば「阿弥陀」といふ三字をば、をさめ・たすけ・すくふとよめるいはれあるがゆるなり。²⁴

と記しており、「南無阿弥陀仏」の「南無」という二字は、極樂浄土へ往生しようと願って阿弥陀仏に深くお従いするという意味であり、「阿弥陀仏」とは、このようにお従いする人々を慈しんでくださり、また、その光明の縁にお遇いすることによって、過去世よりの重罪はすべて消滅し、もはや正定聚に住することになると蓮如は説く。そして「阿弥陀」という三字を「おさめ・たすけ・すくう」と読むいわれがあると説示している。

こうした六字釈を蓮如は記し、民衆に六字名号の意義を分かりやすく伝えようとした。また、膨大な数の六字名号を授与し、本尊の制定、統一をし、六字名号を安置することによって仏教を民衆にとって身近なものとさせることで、門徒を増やしていったものと考えられる。

第三章 大阪における蓮如の足跡

第一節 大阪における教化活動

大阪は瀬戸内海に面しているため、比較的穏やかな地であり、大阪湾から入り込んだ内海の地には住吉大社や四天王寺が造られていることから、古代より比較的安定した地とされていた。

また、当時の大阪は「尾坂」や「小坂」と記され、「おさか」や「こさか」と呼ばれていた。このように表記や呼び名が統一されていないのは、古くからの固有の地名がなかったことがうかがえるが、²⁵大阪という地名の起源は蓮如の『御文章』にあり、第四帖第十五通内で、「そもそも、当国摂州東成郡生玉の庄内大坂といふ在所は、」

²⁶と初めて「大坂」という地名が使われたという説もある。²⁷

今日、親鸞の教えを汲む、いわゆる真宗教団には、約二万カ寺を擁する東西本願寺を始めとして、多数の真宗流派があり、約一三〇〇万門徒を抱える巨大信仰集団を構成している。この教えの展開は全国的なものであるが、(中略)全国的にも有数の真宗繁昌の地域であるといえよう。²⁸

とあるように真宗教団が大阪において繁栄していることが指摘されているが、特に河内国周辺には早くから佛光寺系が伝来していたとされている。この点について、千葉乗隆氏は、

佛光寺は蓮如以前より近畿地方から中国・四国地方にかけて、多数の門徒がいたとされている。出口光善寺・枚方順興寺・久宝寺村西証寺(のち顕証寺)・萱振恵光寺・八尾慈願寺など上人ゆかりの寺が、伝道拠点となり、摂津・河内はもちろん大和(奈良県)・和泉(大阪府)の四カ国に本願寺の教線が伸張し、多数の人びと

が帰依した。²⁹

と早い時期より佛光寺が伝来していたことが記されている。しかし蓮如の時代になると大阪においては、本願寺門徒が急速に増えたと考えられる。すなわち蓮如は継職後早い時期より摂河泉に注目していたようであり、木村壽氏と上場顕雄氏は、

おそらく河川舟運が至便で商工業が発達し、堺の貿易港をもつ畿内先進地帯としてその経済的効果を見通していたのではないだろうか。それは社会的動向や情報を正確に豊富に入手できると蓮如が洞察していたともいえる。³⁰

と指摘しており、畿内で教化活動をするにあたり摂河泉を活動の拠点として重要な位置と考えていたようである。文明七年（一四七五）八月、吉崎を退去後、丹波・摂津を経た後、出口に至った。出口では蓮如の長男である順如が、すでに早くから準備を整えており、蓮如を迎えた。吉崎の退去は下間蓮崇の野望が発覚したため突然退去したとされているが、岡村喜史氏は、

蓮如宗主と出口との関係は、文明七年以前にさかのぼります。文明三年十一月二十八日、蓮如宗主は「河内国茨田郡中振郷出口村中之番」に所在していた本遇寺の賢秀に対して阿弥陀如来絵像を授与していることがわかっています（新潟市西蔵寺蔵）。賢秀は、存如宗主の時から本願寺と関係を持っていた人物で、吉崎を退出した蓮如宗主は、この賢秀を頼って出口にやって来たようです。³¹

と吉崎移住より以前から出口と関係があったことが指摘されており、さらに、長男の順如がすでに蓮如を迎える

準備をしていたことなどから、慎重な下準備がされていたものと考えられる。ここに建立した坊舎が出口坊であり、後の光善寺となる。また、この光善寺という寺号は、出口坊創建の際に蓮如に帰依した、御厨岩見入道光善が埋め立てに取り組んだため、光善寺とされるようになった。光善寺には龍女の伝説が伝わっており、五〇〇年前から光善寺の地に住むという大蛇がこの池を埋め立てられると家がなくなるので、住める範囲の池だけ残してほしいと願い出た。そうしたならば、ここを仏法繁栄の地としていつまでも守り続けると誓い、蓮如はこの地に坊舎を建立したが、龍の形にだけ池を残したという伝説が残っており、実際現在もその池が残されているが、³²蓮如は教団再興を望みこの地を選んだのではなく、後の文明十年（一四七八）には山科本願寺建立に着手しているため、本願寺の再興を山科と踏まえた上で出口を選んだのではないかと考えられる。

また、現在の大阪府八尾市には蓮如が建立した顕証寺も残っている。もともとは、聖徳太子が建立した久宝寺が廃寺となったため、跡地に蓮如が西証寺という寺院を建立し、蓮如の十一男にあたる実順が住持を勤めていたが、永正十五年（一五一八）に没したため、実順の息子である実真がその後住持を勤めるが、実真も享禄二年（一五二九）に没したため、廃寺の危機に陥ったが、この頃の河内国にはすでに多くの真宗門徒が存在し、西証寺の地は、河内国の中央部にあたる重要な位置であったことから、門徒たちの強い要請により、蓮如の六男にあたる蓮淳が住持となった。当時、近江大津顕証寺の住持を勤めていたため、大津の顕証寺と西証寺を兼任することとなったため、西証寺の寺号を顕証寺と称した。³³蓮如の大阪における伝説はこの顕証寺にも伝えられており、蓮如が顕証寺を訪れた際に、村の池に住んでいる大蛇が暴れ周り、村人が困っていることを聞いた蓮如は池に向

かい大蛇を呼び出し、教化すると大蛇は頭蓋骨を残し昇天していったと伝えられている。³⁴このように蓮如の教化の圧倒的な影響力が分かるような逸話も残されており、蓮如が民衆にいかにも慕われていたのかがうかがえる

明応五年（一四九六）八十二歳となった蓮如は摂津国東成郡生玉庄内大坂を寺地として選び、大阪御坊建立に着手した。この大阪の地に坊舎を建立した蓮如は『御文章』第四帖第十五通において、

そもそも、当国摂州東成郡生玉の庄内大坂といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけるにや、さんぬる明応第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ、当年ははやすでに三年の星霜をへたりき。これすなわち往昔の宿縁あさからざる因縁なりとおぼえはんべりぬ。³⁵

と記しており、大阪を初めて訪れて以来、昔からの何か深い縁を感じていたようであり、蓮如が大阪の地に深い思い入れを持っていたことがうかがえる。また、この大阪御坊の場所を選定した理由について伊藤毅氏の指摘によると、

石山の立地も吉崎と類似していた。石山本願寺は上町台地の高地に建設され、そこは古代以来見捨てられていた荒蕪地であった。また吉崎同様、摂津・河内両国の国境に近く、守護勢力の及びにくい場所であったと考えられる。³⁶

と記されており、さらに、京都または摂河泉への交通の便も整っていたため、蓮如はこの地を拠点として教化活動を行おうと考えていたようである。実際に紀州や瀬戸内海沿岸部には新たな本願寺門徒の広がりが見られ、³⁷

広島県西部には、大阪御坊建立前後の時期の開基である寺院があることから、大阪御坊を拠点とした、西日本における蓮如の教化活動の展開があったのだと考えられる。

蓮如の没後、山科より大阪に本願寺が移り、本願寺を中心とした寺内町が形成され、さらに発展していくこととなり、蓮如の大阪における足跡は、伝説とともに数多く残されることとなった。

第二節 光福寺の蓮如関連資料の検討

現在、自坊の光福寺は大阪府太子町にあるが、一五五〇年頃までは大阪府羽曳野市西浦にあったといわれている。『御文章』帖外第五通では、

應仁二年孟冬仲旬の比より江州志賀郡大津邊より忍出、紀伊國高野山一見ついでに、和州吉野の奥十津川のなかせ鬼が城といひしところへゆきはんべりし時、あまりに道すがら難所なりし間、かなしかりしほどに、かくぞつゞけ侍しなり。

高野山より十津河小井田の道にて

奥吉野きびしき山そのはつがひ十津河をつるのなかせの水

十津河の鬼すむ山ときゝしかどすぎにし人のあとゝおもへば

これほどにはげしき山の道すがらのりのゆかりにあらでやはゆく

十津河より小田井の道にて

敵宗

谷々のさかりの紅葉三吉野のよしの、山の秋そのうき
山々のさがしき道をすぎゆけば河にぞつれてかへる下淵
下淵より河つらの道にて

三吉野の河つらつづくいゝがひのいもせの山はちかくこそみれ
河つらより吉野藏王堂一見の時、一年のうかりしことを今思出て

いにしへの心うかりし三吉野のけふは紅葉もさかりとぞみる。

應仁二年孟冬仲旬 信證院兼壽法印³⁸

と蓮如が高野山に向かった時のことが記されており、実際にどの道を通ったのかについては『御文章』には記されていないが、岡村喜史氏によると、

蓮如宗主が天津から高野山に至るに際して、どのルートを取ったのかについては、この御文章には記されていません。ただこのころ京都方面から高野山に行くには、男山（八幡市）の麓から南に延びる高野街道を通るのが通常のルートになります。この街道は、男山から枚方に至り、生駒葛城山系の西麓を通過して河内国を北から南へと縦断する道ですから、蓮如宗主もこの通常の道を通ったものと考えられます。³⁹

と指摘している。また二〇一八年には岡村喜史氏が光福寺の資料調査を行い、その調査結果をまとめた『光福寺法宝物調書』（小冊子・大阪府太子町光福寺蔵）によると、この高野道は光福寺があった羽曳野市西浦と近く、このあたりで蓮如は教化活動を行い、その教化を受けた人々が門徒化していったとされる。楷書の六字名号は応仁

前後に試作され、その後草書の六字名号が授与されていくことから⁴⁰、光福寺に所蔵される蓮如の楷書六字名号は、高野街道を通った際に下付されたものであると考えられる。この時代、光福寺はまだ寺院ではなく、門徒として名号が授与されたものであり、その後、村に名号を守っていく門徒集団が出来上がっていったものと考えられる。実際に、自坊の光福寺より文明二年二月と記された尼了妙に宛てた蓮如筆の法名状が見ついていることから、地域には蓮如の教化を受け、帰依したものが存在したことは事実である。⁴¹また、法名状は女性あてに授与されたものであることから、蓮如による女人往生の一端をうかがい知ることができる。

蓮如の河内国における教化活動の時期について、

蓮如が文明七年（一四七五）吉崎を退去して河内国出口へ滞在した頃以降と考えるのが一般的であろう。その依拠されるのが文明八年九月二七日付の御文で「コノコロ撰州河内大和和泉四ヶ国ノアヒタニヲイテ、当流門徒中ニ」帰する旨、蓮如が記していることによる。⁴²

と記されているが、自坊（光福寺）より文明二年二月と記された法名状が見つかっていることから、文明七年より以前に、すでに河内国で教化活動は行われていたものと考えられる。また、蓮如が吉崎退去後出口を選んだ理由として、木村壽氏や上場顕雄氏は、

吉崎移居以前より蓮如が河内門徒を育成しすでに若干の基盤が存していたこと、などが出口選定に優先されたのではないだろうか。⁴³

と指摘しており、吉崎退去以前より河内国においてすでに教化活動が行われていたのではないかと考えられる。

また、『帖外御文章』第三六通「山科影堂建立章」には、

御影堂ヲ予カ存命之内ニ建立セシメント思企ル処ニ、其志アル事ヲ門下中シリテ、既ニ南方河内国門徒中ヨリ和州吉野之奥エソマ入リヲシテ、ヤカテ十二月仲旬比カトヨ、柱五十余本其外断取ノ材木ヲ上セケリ。(中

略)棟上已後ナケシ敷居ナントハ、和州吉野之材木ヲアツラエ⁴

と記されており、文明十年(一四七八)に山科本願寺の造営が開始される際、御影堂の柱は南方河内国の門徒が吉野から調達してきたものが使われていると『帖外御文章』に記されていることから、文明十年にはすでに河内国の門徒と蓮如の関係が深かったことが分かる。山科本願寺御影堂の材木運搬ルートについて、岡村喜史氏は、「吉野川より紀ノ川を流して大阪湾に到り、それより淀川を引き登り、山科まで運んだものと考えられ」⁴⁵と指摘しており、水運を利用して山科本願寺へ運びだされたと記されている。

また、現在羽曳野市西浦にある覚永寺の資料によると、文明年間、河内十二坊が御真影の護衛を担っていたという資料が残っている。資料内では、文明年間という記録であるが、山科本願寺建立の際に河内国の門徒が調達した材木が使われていたことなどから、文明年間中の御真影とは山科本願寺の御真影ではないかと考えられる。この河内十二坊とは南河内を中心とした寺院により構成された団体であり、『大谷本願寺通紀』には、久宝寺村西証寺(のち顕証寺)の第二十一代が享禄二年(一五二九)没した後、蓮如の第十三子である蓮淳を顕証寺に住持として招いたのは河内十二坊であると記されていることから、⁴⁶蓮淳を招聘することができると一定の立場であったと考えられる。また、この河内十二坊の中に光福寺の寺号も記されていることから、蓮如との関係が文明年間に

はずであつたのではないかと考えられる。また、大澤研一氏は河内十二坊の役割について、

中河内から南河内にかけての有力寺院集団として久宝寺坊を直接支える重要な立場にあつたことは相違ないだろう。与力集団の中核寺院、あるいは与力寺院の筆頭的存在だった可能性もある。⁴⁷

と顕証寺を支える寺院集団であつたことを指摘しているが、享祿二年（一五二九）より以前の文明年間にすでに御真影の護衛を担っていたことから、本来は顕証寺を支えるために構成されたのではないと考えられる。顕証寺が建立された当時について、辻川達雄氏は、

文明元年の春、仮の「祖廟」を目的にして建てられた寺で、本廟・本山的な性格を備えていたが直接の門末を持たない寺院である⁴⁸。

と記されており、当初は門末を持たなかったがのちに、現在の教務所的な役割も担うことになったため、すでに構成されていた河内十二坊が顕証寺を支える立場になったものと考えられる。

また、一五五〇年頃まで光福寺があつたとされる羽曳野市周辺の寺院、例えば富田林市の妙尊寺には蓮如が河内国南部地域に下付した裏書のある文明十九年（一四八七）の方便法身像が確認されていることから、河内国の人々は蓮如の教化活動に感銘を受け、授与を願ひ出たものではないかと考えられる。

早くより真宗が伝播していた大阪、特に摂河泉の利便性に注目した蓮如は早くより摂河泉を拠点とし、教化活動を行っていたことが摂河泉に残る法宝物や資料からわかる。

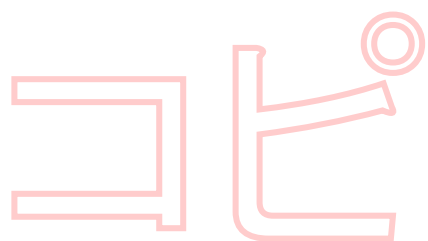
結論

本論文では、蓮如の大阪における教化活動について明らかにしてきた。

第一章では蓮如生涯について、親鸞が目指した御同朋御同行の精神にのっとり、さまざまな教化方法で本願寺を飛躍的に日本有数の教団としていった生涯について明らかにした。第二章では蓮如の教化活動、特に『御文章』による伝道と六字名号の下付について述べ、本願寺継職直後より本尊の制定と統一、『御文章』の製作や六字名号の下付などの画期的な教化方法によって門徒を飛躍的に増加させていったことを明らかにした。第三章では、自坊の光福寺のある大阪、特に河内国においての蓮如の足跡について述べた。また、大阪におけるの教化活動は、水運が便利であり、商工業が発達していた摂河泉に早くより注目し、拠点とし、西日本において教化活動を行ったため、蓮如期に河内国において、本願寺が繁栄したと考えられる。大阪は蓮如より以前の比較的早い時期より真宗が伝来しており、蓮如の時代に多くの人々が帰依したと考えられる。また、自坊のある河内国周辺においても蓮如による教化活動が行われたと考えられる。六字名号が光福寺に下付された理由は、高野街道を通った際に教化活動の一端として蓮如が門徒に授与したものが、門徒が六字名号の下付を願ったのかについては定かではないが、現在の河内国における真宗教線の展開を考えると、蓮如が教化活動の一端として授与したのではないかと考えられる。また、蓮如と光福寺との関係について、山科本願寺建立の際材木の運搬や、御真影の護衛などを

担っていたことから、光福寺は河内十二坊の構成寺院として本願寺と古くより関係があったことが分かった。また、地域社会との関係について、実際に光福寺の門徒宅から実如の六字名号が見つかったことから、蓮如の時代に本願寺が発展し、その後も河内国において本願寺との密接な関係が続いていたと考えられる。

今後、寺院活動を行っていくにあたり、多くのご門徒に本論文で明らかになった光福寺の歴史について伝えていきたいと考える。そして蓮如と光福寺や地域社会との関係について、さらに研究を深めていきたい。



註

1 蓮如の時代の漢字の表記は「大坂」であったが、本稿では現代用いられている「大阪」に統一した。なお引用文など一部「大坂」とした場合もある。

2 岡村喜史『大阪と本願寺④蓮如宗主と大坂坊』浄土真宗本願寺派 大阪教区教務所二〇一五年 一四頁

3 本願寺史料研究所編『本願寺史 第一巻』本願寺史料研究所 一九六一年、岡村喜史『大阪と本願寺④蓮如宗

主と大坂坊』大阪教区教務所 二〇一五年、浄土真宗教学研究研究所編『蓮如上人―その教えと生涯―』本願寺出

版社 一九九五年を参考にした。

4 浄土真宗教学研究研究所編『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』本願寺出版社 一九九五年

5 金龍静『蓮如上人の風景』本願寺出版社 一九九八年 九三〜九四頁

6 岡村喜史・大喜直彦『大阪と本願寺』大阪教区教務所 二〇一三年

7 浄土真宗教学研究研究所編『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』本願寺出版社 一九九五年

8 岡村喜史『大阪と本願寺④蓮如宗主と大坂坊』大阪教区教務所 二〇一五年 二四頁

9 笠原一男『蓮如』吉川弘文館 一九七五年 参照

10 『註釈版』一一五九頁

- 1 1 福間光超・金龍静「蓮如上人の生涯と事跡」『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』本願寺出版社 一九九五年 八三頁
- 1 2 『註釈版』五六七頁
- 1 3 『註釈版』五八九頁
- 1 4 笠原一男『女人往生思想の系譜』吉川弘文館 一九七五年 参照
- 1 5 堅田修編『真宗史料集成第一卷』同朋舎 一九七七年 七二四頁
- 1 6 『註釈版』一〇九八頁
- 1 7 『註釈版』一二五三頁
- 1 8 千葉乗隆『蓮如上人がたり』本願寺出版社 一九九八年 参照
- 1 9 奥林享『大阪と蓮如上人の足跡』法蔵館 一九九八年 一九九頁
- 2 0 奥林享『大阪と蓮如上人の足跡』法蔵館 一九九八年 一八頁
- 2 1 千葉乗隆『蓮如上人がたり』本願寺出版社 一九九八年 参照
- 2 2 『注釈版七祖篇』三二五頁
- 2 3 『註釈版』一七〇頁
- 2 4 『註釈版』一一三三頁
- 2 5 金龍静『蓮如上人の風景』本願寺出版社 一九九八年 参照

禁本蔵

- 2 6 『註釈版』一一八七頁
- 2 7 岡村喜史 「大阪のひとびとと浄土真宗」『蓮如上人と大阪』 自照社出版 一九九七年 参照
- 2 8 木村壽・上場顕雄 「撰河泉における真宗教団の展開」『講座 蓮如 第六卷』平凡社 一九九八年 三三七頁
- 2 9 千葉乗隆 『蓮如上人ものがたり』本願寺出版社 一九九八年 二〇五頁
- 3 0 木村壽・上場顕雄 「撰河泉における真宗教団の展開―蓮如の時期を中心に」『講座 蓮如 第六卷』平凡社 一九九八年 三四九頁
- 3 1 岡村喜史 『大阪と本願寺④蓮如宗主と大坂坊』大阪教区教務所 二〇一五年 三四頁
- 3 2 奥林享 『大阪と蓮如上人の足跡』法蔵館 一九九八年 参照
- 3 3 千葉乗隆 『蓮如上人と大阪』同朋舎 一九九七年 参照
- 3 4 奥林享 『大阪と蓮如上人の足跡』法蔵館 一九九八年 参照
- 3 5 『註釈版』一一八七頁
- 3 6 伊藤毅 「撰津石山本願寺寺内町の構成」『蓮如大系第四卷 蓮如と本願寺教団(下)』法蔵館 一九九六年 一七五―一七六頁
- 3 7 福岡光超・金龍静 「蓮如上人の生涯と事跡」『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』本願寺出版社 一九九五年 参照
- 3 8 禿氏祐祥 「第二篇帖外御文(附、和歌集)」『蓮如上人御文全集』平楽寺書店 一九二二年四頁

- 3 9 岡村喜史『大阪と本願寺④蓮如宗主と大坂坊』大阪教区教務所 二〇一五年 一四頁
- 4 0 金龍静 『蓮如上人の風景』本願寺出版社 一九九八年
- 4 1 岡村喜史『光福寺法宝物調書』光福寺蔵
- 4 2 木村壽・上場顕雄「撰河泉における真宗教団の展開―蓮如の時期を中心に」『講座 蓮如 第六卷』平凡社 一九九八年 三五三頁
- 4 3 木村壽・上場顕雄「撰河泉における真宗教団の展開―蓮如の時期を中心に」『講座 蓮如 第六卷』平凡社 一九九八年 三四七頁
- 4 4 堅田修編『真宗史料集成第二卷』同朋舎 一九七七年 二二九頁
- 4 5 岡村喜史「大阪における蓮如上人の足跡と伝承」『蓮如上人と大阪』一九九七年 二五頁
- 4 6 玄智『大谷本願寺通紀』妻木直良『真宗全書 第六十八卷』国書刊行会 一九一四年
- 4 7 大澤研一「戦国期撰河泉における本願寺の地域編成について」『市大日本史』二〇一二年 三二頁
- 4 8 辻川達雄『蓮如と七人の息子』誠文堂新光社 一九九六年 二九二頁

参考文献

書籍

- 浅井成海『蓮如の手紙―お文・ご文章現代語訳―』国書刊行会 一九九七年
- 朝倉喜祐『吉崎御坊の歴史』国書刊行会 一九九五年
- 宇野行信『聖典セミナー 御文章』本願寺出版社 一九九四年
- 大阪市立博物館編『大阪の町と本願寺』毎日新聞社大阪本社 一九九六年
- 岡村喜史『蓮如畿内・東海を行く』国書刊行会 一九九五年
- 岡村喜史『大阪と本願寺④蓮如宗主と大坂坊』大阪教区教務所 二〇一五年
- 岡村喜史・大喜直彦『大阪と本願寺』大阪教区教務所 二〇一三年
- 奥林享『大阪と蓮如上人の足跡』法蔵館 一九九八年
- 梯實圓・名畑崇・峰岸純夫『蓮如大系 第四卷 蓮如と本願寺教団(下)』法蔵館 一九九六年
- 梯實圓・名畑崇・峰岸純夫『蓮如大系 第一卷 蓮如の生涯』法蔵館 一九九六年
- 笠原一男『女人往生思想の系譜』吉川弘文館 一九七五年
- 笠原一男『蓮如』吉川弘文館 一九八六年
- 堅田修編『真宗史料集成第一卷』同朋舎 一九七七年
- 堅田修編『真宗史料集成第二卷』同朋舎 一九七七年
- 勸学寮編『新編 安心論題綱要』本願寺出版社 一九八二年

- 金龍静 『蓮如上人の風景』 本願寺出版社 一九九八年
- 佐藤今朝夫 『蓮如の手紙・お文・ご文章 現代語訳』 国書刊行会 一九九七年
- 浄土真宗教学研究所編 『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』 本願寺出版社 一九九五年
- 浄土真宗教学研究所編 『浄土真宗聖典蓮如上人御一代記聞書 現代語版』 本願寺出版社 一九九九年
- 真宗新辞典編纂会編 『真宗新辞典』 法蔵館 一九八三年
- 千葉乗隆 『蓮如上人と大阪』 本願寺津村別院 一九九七年
- 千葉乗隆 『蓮如上人ものがたり』 本願寺出版社 一九九八年
- 辻川達雄 『蓮如と七人の息子』 誠文堂新光堂 一九九六年
- 妻木直良 『真宗全書 第六十八卷』 国書刊行会 一九一四年
- 禿氏祐祥 『蓮如上人御文全集』 平楽寺書店 一九二二年
- 平井清盛 『蓮如上人の母とその身内』 永田文永堂 一九九六年
- 平井清盛 『蓮如とその母』 永田文昌堂 一九八三年
- 本願寺史料研究所編 『本願寺史 第一巻』 本願寺出版社 一九六一年
- 本願寺史料研究所編 『増補改訂 本願寺史 第一巻』 本願寺出版社 二〇一〇年
- 和田重厚 『蓮如伝説を歩く』 戎光祥 二〇〇三年
- 『浄土真宗聖典（註釈版）』 本願寺出版社 一九八八年

『浄土真宗聖典七祖篇（註釈版）』本願寺出版社 一九九七年

論文

赤松俊秀 「蓮如上人とその時代」『竜谷教学』第八号 一九七三年

伊藤毅 「摂津石山本願寺寺内町の構成」『蓮如大系第四卷 蓮如と本願寺教団（下）』法蔵館 一九九六年

大澤研一 「蓮如の大坂進出の前提について―浄昭坊の動向を中心に―」『竜谷教学』第八号 一九七三年

岡村喜史 「大阪における蓮如上人の足跡と伝承」『蓮如上人と大阪』一九九七年 二五頁

木村壽・上場顕雄 「摂河泉における真宗教団の展開―蓮如の時期を中心に」『講座 蓮如 第六卷』平凡社

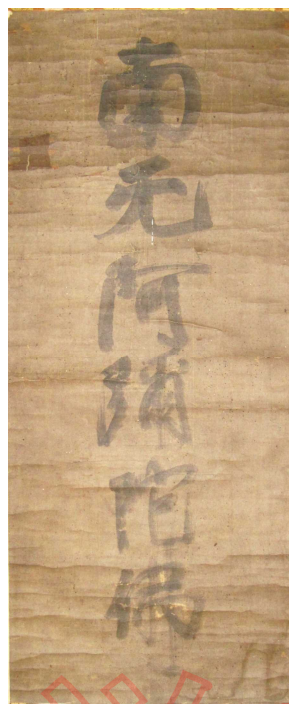
一九九八年

近石哲 「蓮如上人における伝道の特徴」『真宗学科学生論文集』第一五号 永田文昌堂、二〇一〇年

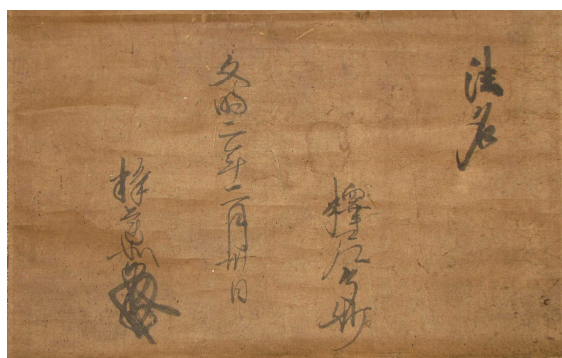
信国精一 「蓮如上人の冥加思想について―その現実的意義―」『竜谷教学』第八号 一九七三年

資料編

一、楷書六字名号 光福寺藏



二、蓮如上人筆法名状 (光福寺藏)



コピー 一 廠禁